

大学キャンパスの認知マップ：（その2） 教育プログラムの評価と教育環境の役割

川戸 さえ子・大井 直子・原 一雄

はしがき

大学構内の諸々の施設からイメージされる「物理的環境」は、学生が常時密接な接触を持つ重要な教育環境の一側面である。しかし、それに優るとも劣らぬ大切な役割を果たしているのが大学の「行動的環境」であり、それはキャンパスの内外で営まれる種々の教育プログラムや行事によって醸し出される学園の雰囲気の意味している。その中には学生たちの行動様式を一時的もしくは周期的に、また、意識的ないしは無意識的に、方向づけたりコントロールする力を強く持つものが含まれており、学生たちがそれらをどのように認知するかによって、もう一方の「物理的環境」の影響力もまた、大きく変化させられる。そして、この両者の相互作用を無視しては、如何なる「環境」の問題も論ずることはできない。（原，1975，1979）

さて、このように学生たちが認知する「行動的環境」は、大学当局の理念や教育方針がどのように受け入れられているかを反映させていると同時に、学生側が積極的に参加しているかどうかの態度を測るバロメーターでもある。言い直せば、「行動的環境」とは学生同士、あるいは学生たちと教職員たちとの間の知的・感情的・人格的な交流が行なわれる「心理的な場」であり、それ故に、この「行動的環境」を創り出す個々のプログラムや行事に対する学生たちのイメージを直接的に、あるいは間接的に把握することは、いろいろな教育活動の評価とそれらの改善方法の策定にとって不可欠な作業と考えられる。そこで本学においては、今までに学園の教育環境について一連の自

己評価が行なわれてきたが、(Hara, 1986, 1987:原他, 1972:原他, 1980:岩瀬他, 1969:土屋他, 1971:植田他, 1984)今回更に、環境次元間の交互作用を明らかにするため、「物理的環境」の調査(大井他, 1989)に加えて次の調査を施行する。

調 査 III

目 的

本研究は学生たちが認知する大学の「行動的環境」を評価するための方法を開発し、「物理的環境」の評価との比較を試みるものである。すなわち、キャンパスの内外で施行される諸々の教育プログラムや恒例の諸行事に対して学生たちが抱くイメージを意味分析(Semantic differential:SD)法(Osgood et al., 1957)を用いて査定し、そこから学園生活を潜在的に支えている認知的諸要因を抽出して、これらのプログラムや行事の教育的役割を検討し、最後に「行動的環境」と「物理的環境」の評価を基に大学キャンパスの認知マップを描き出し、両者の関係を通じて教育的実践活動の促進と改善の可能性を探る具体的な足懸りを求めることを本研究の目的とする。

方 法

被調査者: 教養学部学生と大学院院生, 合計60名。

調査手続: 同名表題の論文(その1)(大井他, 1990)の中に記された「調査II」を施行する際に、次に述べる質問紙を同時に配布して被調査者に協力を依頼し、数日後に回答を無記名のまま返却させた。

検査用具: 質問紙は(その1)と全く同じ様式のものを使用した。すなわち、SD法の形式に基づき、16項目の形容詞対それぞれに7段階の評定尺度を設けたものである。用いた「行動的環境」項目としての刺激語は、本学の代表的な教育プログラムと恒例の学園行事計24項目で、それらを(1)アカデミック・プログラム, (2)学生指導プログラム, (3)その他の公的プログラム, (4)

学生主体の課外活動の順に列挙すれば以下の通りである。

- 1) 語学教育プログラム, 保健体育プログラム, 一般教育プログラム, 専門教育プログラム, 入学式, レジストレーション, 学期末試験, 図書館サービス, ランゲージ・ラボ, コンピュータ。
- 2) アドバイザー・システム, 学生相談・カウンセリング, 就職進学相談, クリニック・サービス。
- 3) フレッシュマン・リトリート, キリスト教週間, コンボケーション, 教授宅訪問, 国際的学園生活, 宗教プログラム。
- 4) 文化系課外活動, 体育系課外活動, ICU祭, アルバイト。

手続き: 「物理的環境」の場合と同様, 各個人が「行動的環境」のある刺激語に与えた評定点に16対の評定尺度それぞれに含まれる3つの因子負荷量を次元毎に加重して個人の因子得点を算出し, 被調査者全員の平均値を求めた。更に, 次元別に個人の因子得点を基にして16項目間の相関マトリックスを求め, 主因子法による因子分析を施行した後, バリマックス回転を施して, 3つの次元毎に「行動的環境」の潜在的因子構造を明らかにすることを試みた。

結 果

24項目の刺激語それぞれについて算出した全被調査者の次元別平均因子得点を, 「評価」因子得点の高い順に並べて比較したのが表1であり, それを図示したのが図1である。

次に, 「評価」「活動」「力量」の各次元毎に因子得点を基にして因子分析を施行した結果, それぞれの次元から更に3つの下位因子が見出された。

「評価」次元の結果は表2に, 「活動」次元の結果は表3に, そして「力量」次元の結果は表4にそれぞれ示される通りである。

最後に, この研究で述べた「行動的環境」の「評価」因子得点と, 本誌同

同掲載の論文（その1）（大井他, 1990）で取り扱った「物理的環境」の「評価」因子得点との対応を見るため、それぞれの得点を高中低の3段階に大きく分けた後、その分類を「行動的環境」はプログラムや行事が主として実施される施設とその周辺地域に、また、「物理的環境」は刺激語として用いれ場所と周辺地域に、キャンパスの認知マップとして示したのが図2と図3である。

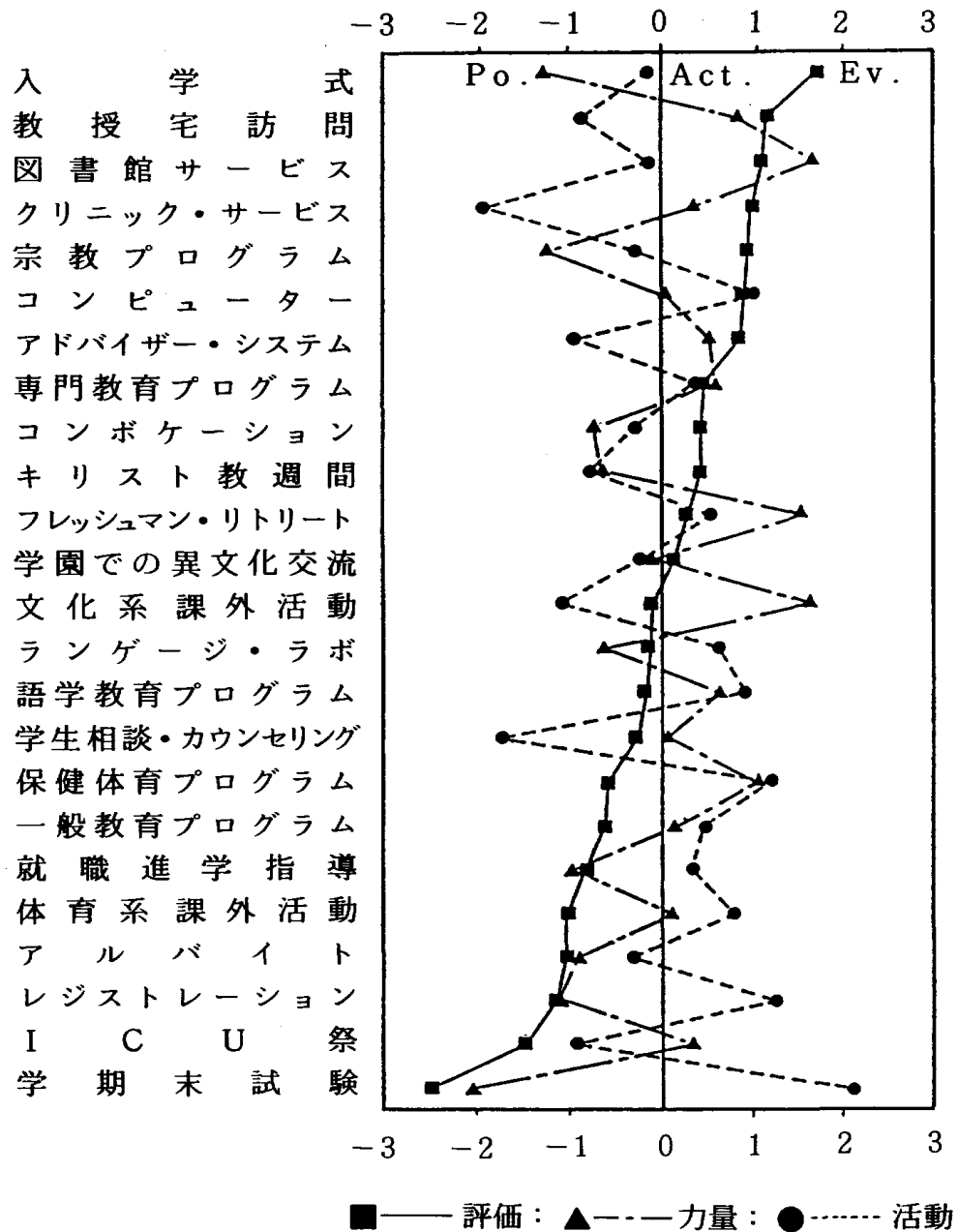


図1 行動的環境項目の平均因子得点

表1 「行動的環境」刺激項目の次元別平均因子得点

	因 子		
	評 価	活 動	力 量
入 学 式	1.74	-.15	-1.28
教 授 宅 訪 問	1.18	-.88	.83
図 書 館 サ ー ビ ス	1.13	-.12	1.71
ク リ ニ ッ ク ・ サ ー ビ ス	1.02	-1.91	.37
宗 教 プ ロ グ ラ ム	.98	-.26	-1.21
コ ン ピ ュ ー タ ー	.94	1.02	.06
ア ド ヴ ァ イ ザ ー ・ シ ス テ ム	.88	-.93	.57
専 門 教 育 プ ロ グ ラ ム	.48	.39	.61
コ ン ボ ケ ー シ ョ ン	.45	-.31	-.75
キ リ ス ト 教 週 間	.45	-.80	-.67
フ レ ッ シ ュ マ ン ・ リ ト リ ー ト	.30	.55	1.59
学 園 で の 異 文 化 交 流	.13	-.22	-.09
文 化 系 課 外 活 動	-.10	-1.12	1.66
ラ ン ゲ ー ジ ・ ラ ボ	-.11	.61	-.65
語 学 教 育 プ ロ グ ラ ム	-.14	.93	.65
学 生 相 談 ・ カ ウ ン セ リ ン グ	-.24	-1.74	.06
保 健 体 育 プ ロ グ ラ ム	-.58	1.22	1.05
一 般 教 育 プ ロ グ ラ ム	-.60	.46	.17
就 職 進 学 指 導	-.83	.31	-.98
体 育 系 課 外 活 動	-1.02	.80	.14
ア ル バ イ ト	-1.02	-.33	-.91
レ ジ ス ト レ ー シ ョ ン	-1.14	1.29	-1.11
I C U 祭	-1.47	-.92	.37
学 期 末 試 験	-2.44	2.13	-2.05

表2 「評価」次元内における行動的環境項目の因子構造

	下 位 因 子		
	I	II	III
学 期 末 試 験	.76	-.08	-.19
保健体育プログラム	.75	-.06	.39
就職（進学）指導	.75	.30	-.16
異 文 化 交 流	.71	.15	.21
ランゲージ・ラボ	.70	.06	-.05
語学プログラム	.68	.32	.35
コンピュ ー タ ー	.51	.19	-.12
レジストレーション	.50	.39	.08
フレッシュマン・ トリート	.48	.38	.31
教授宅訪問	-.04	.73	.29
コンボケーション	-.07	.69	.03
キリスト教週間	.47	.65	-.19
図書館サービス	-.00	.57	.11
アドバイザー・システム	.35	.55	.28
専門教育プログラム	.44	.54	.21
入 学 式	.52	.53	.04
宗教プログラム	.39	.52	-.17
ク リ ニ ッ ク	.31	.49	.06
一般教育プログラム	.30	.45	-.15
I C U 祭	-.05	.02	.82
体育系 課外活動	.49	.09	.65
文化系 課外活動	-.06	.17	.53
学 生 相 談	.20	.37	.45
ア ル バ イ ト	.22	.04	-.06

表3 「活動」次元内における行動的環境項目の因子構造

	下 位 因 子		
	I	II	III
語学プログラム	.84	.11	.03
保健体育プログラム	.76	.19	.06
フレッシュマン・トリート	.67	.12	.08
体育系 課外活動	.67	.00	.04
異文化 交流	.63	.67	-.10
入 学 式	.63	-.00	.30
図書館 サービス	.51	.34	-.11
教授宅 訪問	.36	.23	-.10
ク リ ニ ッ ク	.29	.28	.08
ア ル バ イ ト	.16	.07	.04
就 職 指 導	.07	.69	-.08
レジストレーション	.28	.61	.08
宗教プログラム	-.01	.58	.53
キリスト教週間	.41	.53	.34
コンピュ ーター	.36	.50	-.09
専門教育プログラム	.05	.50	-.06
学 期 末 試 験	.46	.48	.05
I C U 祭	.40	-.45	.27
ランゲージ・ラボ	.34	.43	.34
ア ド バ イ ザ ー	-.05	.15	.71
文化系 課外活動	-.03	-.25	.66
一般教育プログラム	.18	.07	.63
コンボケーション	.39	.11	.56
学 生 相 談	-.04	-.23	.46

表4 「力量」次元内における行動的環境項目の因子構造

	下 位 因 子		
	I	II	III
キリスト教週間	.74	.28	-.15
保健体育プログラム	.72	-.28	.07
入 学 式	.68	.21	.31
ランゲージ・ラボ	.66	.10	-.01
I C U 祭	.63	.22	-.04
語学プログラム	.54	-.14	.35
一般教育プログラム	.48	.24	.20
宗教プログラム	.48	.24	.20
学期末試験	.42	-.36	.41
専門プログラム	.40	.17	.39
ク リ ニ ッ ク	.10	.69	-.26
教授宅訪問	.09	.65	-.14
学生相談	-.11	.63	.24
文化系課外活動	.16	.57	.18
コンボケーション	.10	.53	.30
異文化交流	.26	.50	.43
アドバイザー	.25	.46	-.07
レジストレーション	.15	-.10	.56
コンピューター	.24	-.00	-.55
就職指導	.25	.38	.47
体育系課外活動	.23	-.12	.47
図書館サービス	-.01	.08	.46

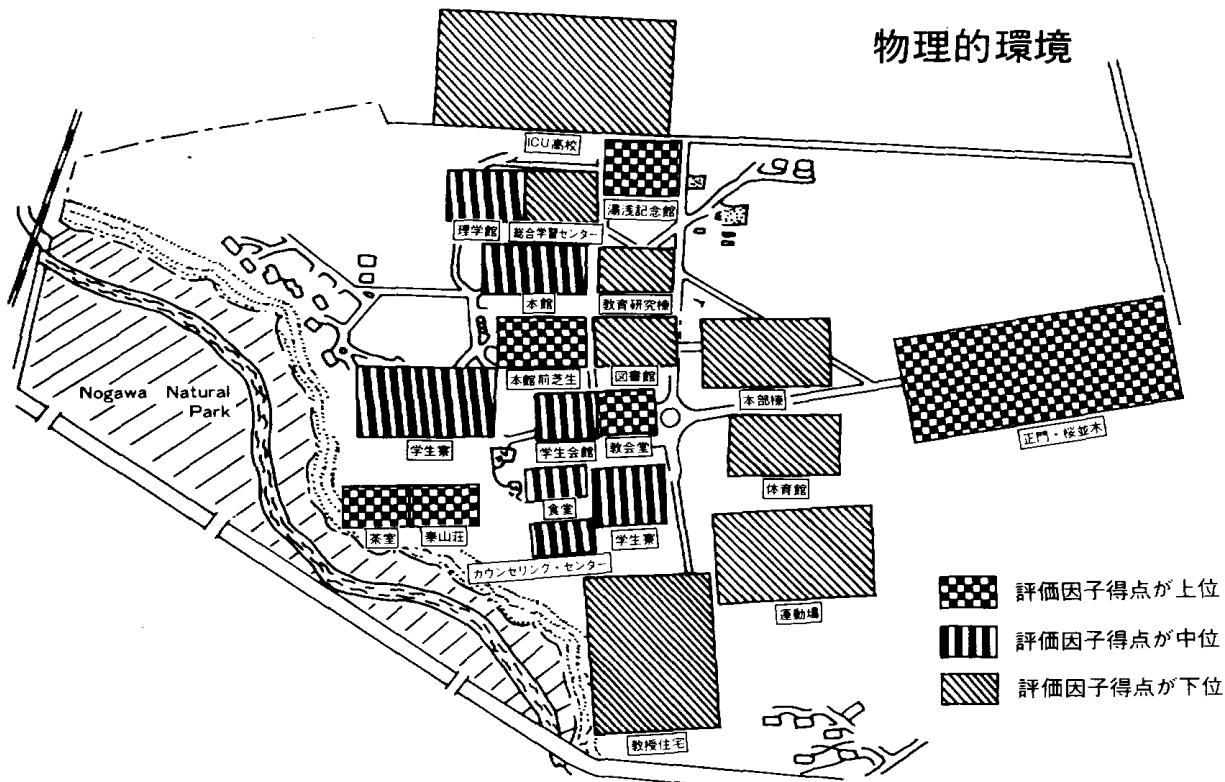


図2 「物理的環境」の「評価」因子得点に基づく大学キャンパスの認知マップ

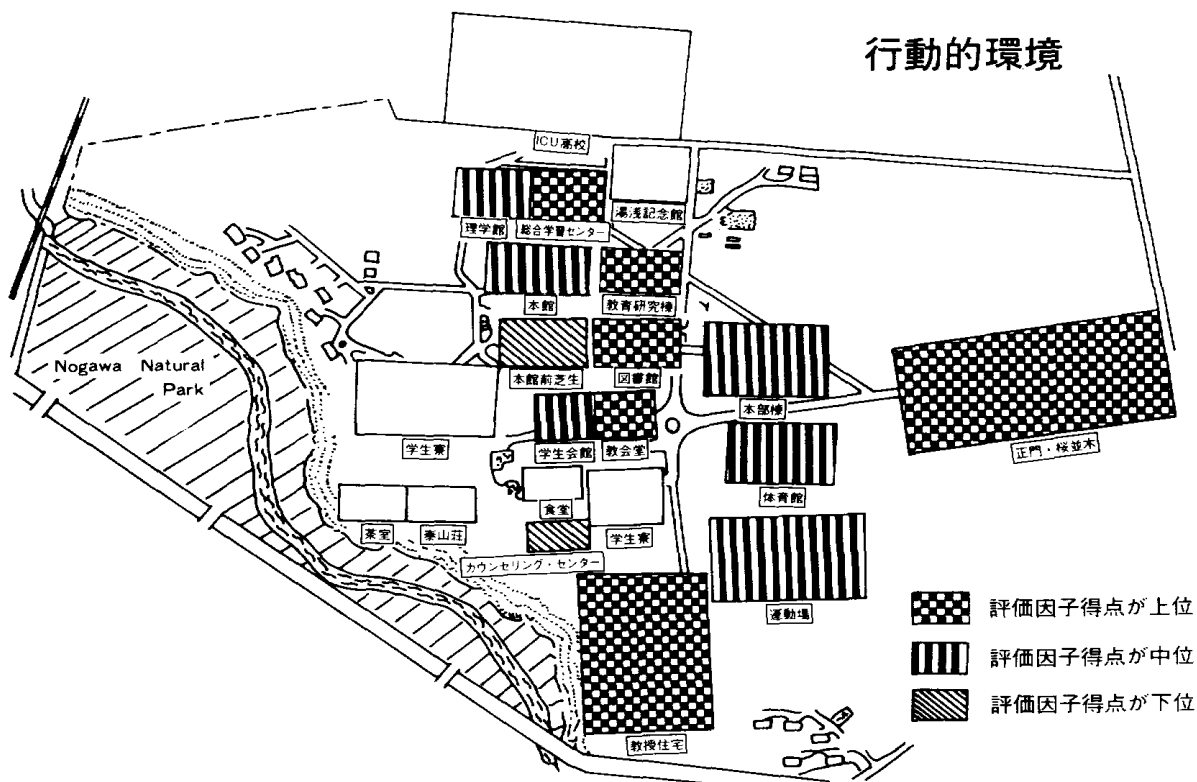


図3 「行動的環境」の「評価」因子得点に基づく大学キャンパスの認知マップ

考 察

1. 各次元の因子得点について

「行動的環境」を「評価」「活動」「力量」の3つの次元から考察すると、表1および図1から明らかなように、それぞれの次元は必ずしも純粹に独立しておらず、多くの場合、次元間で可成りの重複ないしは交互作用のあることが推測される。ある特定の次元でのみ因子得点が高く他の2つの次元で中立的評定値のゼロに近い項目は、フレッシュマン・リトリートと学生相談・カウンセリングの2つに限られ、その他の「行動的環境」項目のほとんどが2つの次元にまたがって、複合的ないしは斜交軸的構造を示している。従って、これらを同時に吟味することは困難なので、先ず各次元毎に因子得点の最も大きな刺激語を取り出して検討してみることにする。

表1の上段または図1の右上から明らかなように、「評価」因子得点の最も高い刺激語は入学式、教授宅訪問、図書館サービス、クリニック・サービスの順であり、宗教プログラム、コンピュータ、アドバイザー・システム等がこれに続いている。他方、「評価」因子得点の最も低い刺激語としては表の最下段、図の左下隅の学期末試験が他に抜きん出ており、その上にICU祭、レジストレーション、アルバイト、体育系課外活動、就職進学指導等が低得点の項目として並んでいる。

次に「活動」因子得点を見ると、学期末試験が最高で、次にレジストレーション、保健体育プログラム、コンピュータ、そして少し下がって語学教育プログラムと体育系課外活動が続いている。「活動」因子得点の最下位にはクリニック・サービスと学生相談・カウンセリングがあり、続いて文化系課外活動、アドバイザー・システム、ICU祭、教授宅訪問、キリスト教週間等の項目が見出される。

「力量」の面からこれらの刺激語を比較すると、最上位には図書館サービス、文化系課外活動、フレッシュマン・リトリートが肩を並べ、次に保健体育プログラムと教授宅訪問が続いている。最下位には学期末試験が群を抜いており、入学式、宗教プログラム、レジストレーション、就職進学指導、ア

ルバイトといった項目が続いている。

さて、「評価」の次元から見た「行動的環境」のイメージ全体を考察してみると、所謂本学の特色を表すものと見做されている教授宅訪問、宗教プログラム、キリスト教週間、コンボケーションなどは、相対的に高い「評価」を受けていることが明らかにされた。しかしながらアカデミックな側面、すなわち、専門教育プログラム、語学プログラム、一般教育プログラムなどの評価が低い傾向にあることは、その原因を大いに究明しなければならない点である。また、「評価」因子得点の高いものであっても、他の因子得点との間で大きくバランスを欠くもののあることが注目を引く。例えば、入学式と宗教プログラムは予想に反して「力量」的イメージが弱く、クリニックは「活動」的イメージが弱く、これらのプログラムの行事には多くの改善を要することを物語っている。

「活動」的次元からみた「行動的環境」のイメージについては、学期末試験の他、レジストレーション、保健体育プログラム等、全学生の参加が要請されているアカデミックなプログラムや行事等に対して、強い印象を与えているような傾向が見受けられる。しかもこれらの項目の多くは「活動」的イメージが強いにもかかわらず、「評価」と「力量」面が低い。すなわち、アカデミック・プログラムの重要性に反して、学生たちが抱いている態度は極めて消極的であり、大学生活の活性化を計る上からは即刻検討を加えなければならないものであろう。また、学生たちの生活面を後から支援するクリニック、学生相談、アドバイザーシステム等に対しては「活動」的イメージが極めて弱く、これらのサービス・プログラムは、学生たちに向かって今後一層、積極的にアプローチしなければならないことを示唆している。

「力量」的側面に注目すると、大方の予想に反してキリスト教週間、宗教プログラム、コンボケーション等の全学的プログラムや行事において、「力量」的イメージがすこぶる弱いということが判明した。この側面について因子得点から論ずることは余りない。

ところで、もしも各刺激項目の3次元の平均因子得点間に大きな差がある

ということは、学生が当該行事ないし教育プログラムに対して各イメージの特性を浮き彫りにさせていることを示すものであり、今後、それらの行事やプログラムを促進し改善させるために重要な示唆を与えてくれるものである。例えば、当大学の公式行事が行なわれる教会堂は、所謂「評価」的イメージが高いにもかかわらず、これに対して「力量」的なイメージが甚だ弱く、ここには教育政策上、更に強化改善しなければならない余地のあることを示している。また、学園内での異文化間交流やICU祭に対して「活動」的イメージが弱いのも、個人レベルにおける交流の活発化と、課外活動全般、特にICU祭のような全学的行事への学生たちの能動的参加を促す方策と雰囲気作りが必要であることを示唆している。

2. 「評価」次元の下位因子構造

表2に示された通り、24の刺激語に与えた「評価」因子得点から3つの因子が抽出された。因子負荷量が.60以上のものを取り出すと、第1因子(I)では語学プログラム、保健体育プログラム、学園内での異文化交流、学期末試験、ランゲージ・ラボ、就職進学指導の6項目、第2因子(II)ではコンボケーション、キリスト教週間、教授宅訪問の3項目、第3因子(III)ではICU祭、体育系課外活動の2項目が、それぞれの因子次元を代表する「行動的環境」として挙げることができる。

さて、この「評価」の第1因子は、主として教育的なプログラムや行事を代表するところから、同じ「評価」次元の中でもアカデミックな側面を表わすものと考えられる。一方、第2因子の負荷量が高い項目は、如何にもICUらしいプログラムと見なされるもので、本学の独自性を象徴する側面を評価するものと解釈しても間違いではなかろう。第3因子は、上記2項目の他に、文化系課外活動、学生相談、保健体育プログラム、語学プログラム等、学生間で活発な交流が行なわれる場を捉らえて評価を行なう側面と言うことが出来よう。

そこで、これらの下位因子毎に改めて「評価」因子得点の平均点を調べて

みると、第2因子の負荷量が大きな項目は「評価」因子得点も他に比べて高い傾向にあり、他方、第3因子を多く含む項目は「評価」因子得点が低いという傾向が見られた。

3. 「活動」次元の下位因子構造

表3に示されたように、「活動」因子得点を因子分析した結果、ここからも3つの下位因子が抽出されたが、各因子次元の独立性に関しては、前述の「評価」次元以上に疑わしい。すなわち、2つないし3つの次元にまたがる項目が少なくない。それはさて置き、一応因子負荷量が.60以上のものを列挙してみると、第1因子(I)では語学プログラム、保健体育プログラム、フレッシュマン・リトリート、体育系課外活動、学園内での異文化交流、入学式の6項目、第2因子(II)では就職進学指導、レジストレーションと、先に述べた学園内での異文化交流の3項目、第3因子(III)としてはアドバイザー・システム、文化系課外活動、一般教育プログラムの3項目であった。

「評価」下位因子と比べて、3つの「活動」下位因子を特徴づけることはそれ程容易ではない。「活動」第1因子に挙げられた項目は、入学直後、すなわち、フレッシュマンの時代に参加したプログラムや行事から得られた印象が強く働いているように見受けられる。第2因子は、常にサービスとして提供されているが、学生の主体的な参加または積極的な利用を必要とする、動的なプログラムである。それに比べ、第3因子はやや静的なプログラムや行事に代表され、それぞれの学生にとって受取る意味の異なることが多いものである。

これらの下位因子毎に「活動」因子得点の平均点をみると、第1因子と第2因子の活動が高い傾向にあり、第3因子の活動水準は低い傾向が見られた。

4. 「力量」次元の下位因子構造

「力量」因子得点を因子分析した結果、先の「評価」次元と「活動」次元とに倣い、一応3つの下位因子を抽出してみた。第1因子(I)で因子負荷量が

.60以上の刺激語は、キリスト教週間、保健体育プログラム、入学式、ランゲージラボ、ICU祭の5項目であった。第2因子(Ⅱ)では教授宅訪問、学生相談サービス、クリニック・サービスの3項目である。第3因子(Ⅲ)には負荷量が.60以上のものはなく、.50以上のものとしてレジストレーション、コンピュータ・サービスが上位に見出される。

この結果から、「力量」次元の因子構造は、比較的動的な第1因子を多く含むプログラムや行事と、より静的な第2因子から成り立つプログラムや行事の2つに分けられ、しかも基になる因子得点においては高低さまざまで、特に目立った傾向は見出されなかった。また第3因子についても、意味のある解釈は困難であった。

5. 「物理的環境」と「行動的環境」との対応関係

上に掲げた図1と、本誌掲載の(その1)(大井 他, 1990)に示された図1とを比較すると一見明らかなように、恒例の行事や教育プログラムの平均「評価」因子得点が抽くプロフィールは、それらの行事やプログラムが実施されている建物や施設等の「物理的環境」項目が抽く平均値のパターンと極めて密接な関連のあることが推察できる。それをより具体的に図示したのが図2と図3である。

両方の図で共に「評価」因子得点の高い地域は正門・桜並木、教会堂の2箇所であり、「物理的」にも「行動的」にも本学の象徴となっている環境要因である。他方、両方の調査で共に「評価」因子得点の低い地域は本館、理学館、学生会館の3箇所であり、これらが本学の教育活動にとって最も中枢的なプログラムと場所とを意味するだけに、非常な危機感を覚えさせるものである。他の地域では「評価」因子得点が1段階ずれているに過ぎなく、2つの環境尺度の間で高低が大きく相違したところはない。このことから、「物理的環境」と「行動的環境」とは極めて密接に対応していると推論される。

結 語

大学キャンパスの「物理的環境」と「行動的環境」とを別々の被調査者群に評定させたにもかかわらず、教育プログラムや恒例の行事とそれらが実施される施設ならびに場所に対するイメージから描き出された認知マップの間には、非常に高い類似性が見出された。僅かながら「評価」が相違している箇所は、そこで学園生活を営む学生たちにとって「物理的環境」と「行動的環境」とが必ずしも旨く融合していないか、あるいはそれ程明確に弁別し評価することが難しいことを示唆している。

そもそも、われわれが教育プログラムの改善を図るには、先ずそれが施行される「物理的環境」を絶えず改善する必要があることは言うまでもない。それと同時に、その「物理的環境」の特性を生かしたプログラムを展開させることにより、その大学独特な「行動的環境」を創り上げ、その心理的社会的道徳的な支えの上に、はじめて教育の効果を一層促進させることが可能となるのである。

さて、本学では自然に恵まれた広大なキャンパスの中で、他の大学に類のない独特な教育プログラムや学園行事を数多く試みてきた。それらは取りも直さず、国際的な成員が自由にして民主的な共同生活を営みつつ勉学と研究活動に従事し、宗教的雰囲気の下で将来社会で役立つ奉仕活動の実践を試みることが可能なように、創立者たちが意図して設けた「物理的環境」と「行動的環境」に他ならない。

そこで、如何にこれらの「物理的環境」と「行動的環境」とを有機的に連係させ、どのようにこれらの環境に対する認知的水準を高め、そして、如何なる工夫をもってこれらの環境要因を加味したわれわれの教育活動に学生たちを自発的能動的に参加させることが可能となるのだろうか。これらの問題は、環境と人間との交互作用を追求する「環境心理学」の単なる一研究課題というよりは、むしろ、これこそ正に『本学の理念』の達成に参画する教員、職員、そして学生たち、すなわちICUファミリー全員にとっての一大関心事であり、究極の目標を達成させるために絶対不可欠な研究課題であると言

っても過言ではあるまい。大学こぞっての自己点検に、本研究の資料が役立つことを願って止まない次第である。

文 献

- 原 一雄 (1975) 「『環境心理学』考」『教育研究』 18, 95-120.
- 原 一雄 (1979) 「環境心理学の視座と使命」望月 衛・大山 正 (編) 『環境心理学』 287-300.
- HARA, Kazuo (1986) "A transdisciplinary model for the concepts of 'environment' and survey studies of college atmosphere." Ittelson, W. H. et al. (ed.) *Cross Cultural Research in Environment and Behavior*. Univ. of Arizona. 101-116.
- HARA, Kazuo (1987) "Self appraisal of international experiences on campus: Comparisons among sub-groups of university constituents." In Hara, K. (ed.) *The Internationalization of Higher Education*, ICU. 269-278.
- 原 一雄・中山和彦・星野悠子・岩瀬純一・土屋静子 (1972) 「大学教育の総合評価 その4 在学生・卒業生・教職員による学生生活の評価の比較研究」『教育研究』 16, 35-54.
- 原 一雄・牧野文恵・松村治子・村山興子・島田博美 (1980) 「国際基督教大学における教育環境調査の試み」『教育研究』 23, 111-129.
- 岩瀬純一・中山和彦・原 一雄 (1969) 「大学教育の総合評価 その2 I C U 在学生による学生生活の評価」『教育研究』 14, 141-155.

- 大井直子・川戸さえ子・原 一雄（1990） 「大学キャンパスの認知マップ
：（その1） 教育環境の意味次元と学园内施設の評価」『教育研究』 32, 23-39.
- Osgood, C. E. , Suci, G. J. , and Tannenbaum, P. H. (1957)
The Measurement of Meaning. Univ. Illinois Press.
- 土屋静子・原 一雄（1971） 「大学教育の総合評価 その3 卒業生による
学生生活の評価」『教育研究』 15, 49-85.
- 植田淳子・石塚正一・原 一雄（1984） 「ICUの教育的環境の調査研究
- 他大学との比較」『教育研究』 26, 65-83.

注) 本研究を遂行するに当り, 教養学部学生赤羽未果さんに, データの入力
ならびに図表の作成に助力して頂いたことをここに付記し, 深く感謝の意
を表したい。

COGNITIVE MAPPING OF UNIVERSITY CAMPUS

(2) Evaluation of Academic Programs and the Role of Educational Environment

(English Résumé)

Saeko Kawado, Naoko Ooi and Kazuo Hara

STUDY III

Purpose

The third study in a series of survey on the campus atmosphere aimed at to analyze the factorial constituents of "behavioral" environment, as well as to explore the relationships between the above and the "physical" environment in order to seek better ways of utilizing most fortunately blessed resources given to us for the ultimate educational goals of this university.

Method

Subjects were 60 college students including a few graduates. The same questionnaire for the measurement of "physical" environment (Ooi et al., 1990) was employed. Instead of the names of facilities used for imagery in the former study, present study employed 24 stimulus words which were representing our campus activities. They were in the 4 categories as follows;

- (1) 10 academic programs—*Language Program, Physical Education Program, General Education Program, Specialized Major Program, Matriculation, Registration, Final Examination, Library Service, Language Lab., Computer Service.*
- (2) 4 guidance programs—*Advisor System, Counseling, Placement, Clinic.*
- (3) 6 formal events—*Freshman Retreat, Christianity Week, Convocation,*

Faculty Home Visiting, International Campus, Religious Program.

(4) 4 extra curricular activities—*Cultural Clubs, Sports Clubs, ICU Festival, Part-time Job.*

Responses to the SD scales were treated by the same way as for the previous study, i.e. mean weighted scores in the 3 factorial dimensions were calculated for each stimulus word, and then factorial analyses were conducted on each dimension in order to further analyze the sub-factorial constituents and their interactions.

Results and Discussion

Weighted scores for all "behavioral" environments for the 3 dimensions were calculated. Three sub-factors were extracted from each of those 3 dimensions. However, it was observed that they are not completely independent each others, because those weighted scores were positively correlated among two or three dimensions for the most of behavioral items.

In the "Evaluative" dimension, such stimulus words as *Faculty Home Visiting, Religious Programs, Christianity Week, and Convocation*, all of which have been regarded as the most unique features of ICU, received relatively high levels of evaluation, while those academic programs such as *Specialized Major Program, Language Programs, and General Education Program* received rather low levels of evaluation.

In the "Activity" dimension, such items like *Final Examination, Registration, and Physical Education Program*, all of which represented the college-wide events or programs, tended to be evaluated higher than others. Unlike to our expectation, however, these items were evaluated rather low in "Potency."

Interestingly enough, evaluations of the "physical" and the "behavioral" environments more or less well corresponded each others. *Front Gate and Cherry Boulevard, and University Chapel* gained very high "Evaluative"

scores in both "physical" and "behavioral" environments. On the other hand, *University Hall*, *Diffendorfer Memorial Hall*, and those activities taken place in these facilities received relatively low "Evaluative" scores in both environments.

Since the above facilities and associated activities are most indispensable for the educational program of ICU, some remedial measures as well as a long-term plan for improvement should be acted at immediately in order to change the students' images of the campus, if they might have been deviated from which our founders had laied down for us as our ideals and goals to persuit.